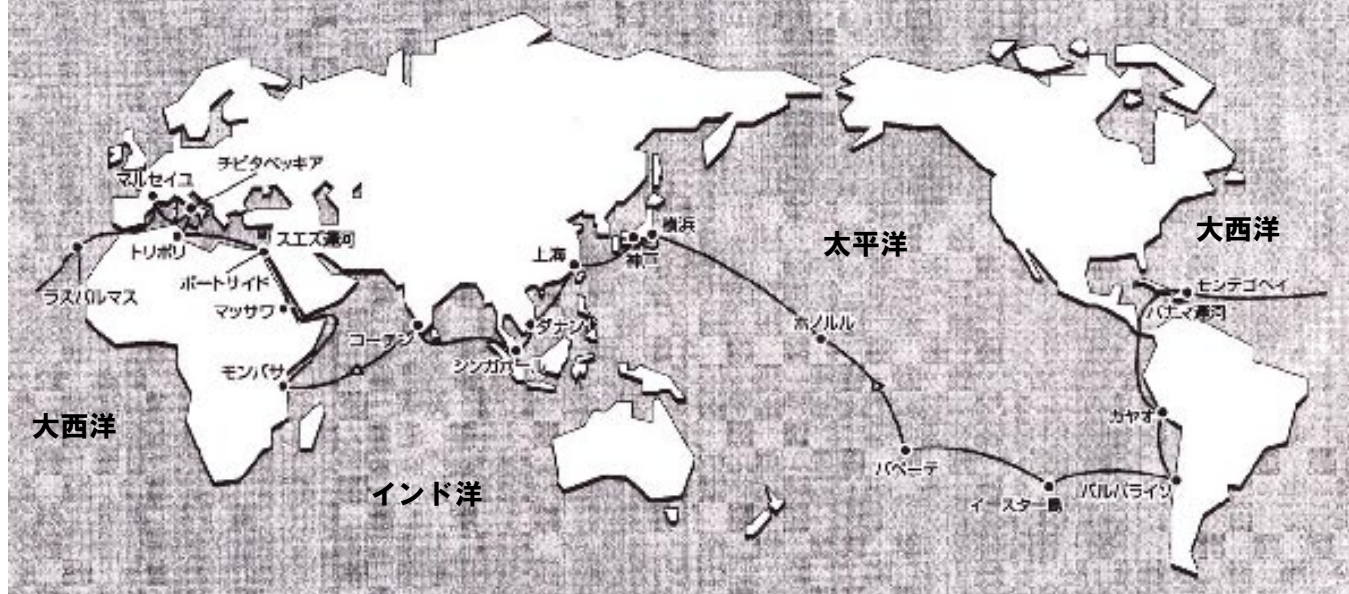


第 48 回ピースボート・地球一周クルーズ 航路



5回目までは、ピースボート乗船中に書いて寄港地から送っていたが、6回目以降は、下船してから日記や備忘録を見ながら書いてきた。しかし下船して半年も経つと、思い出や感激も薄れてきて、正直のところ書く意欲がなくなってきた。前回までの続きだと、パナマ運河、カヤオ（ペルー）、バルパライソ（チリ）、イースター島（チリ領）、パペーテ（タヒチ・フランス領）、ホノルル、そして横浜と、残り40日余の旅が続くのだが、それは、航路図だけということにしたい。今回と次回で、帰国数日前の大荒れの太平洋上で書きとめておいた、ピースボートへの全般的な“感想（クレームがほとんどだが）”で締めたいと思う。



「参加資格はいっさい問わない。年齢、国籍、職業、障害のあるなしも関係なし。誰でも自由に参加できる場。みんなが主役で船を出そう。」パンフレットのそんな言葉に誘われて、かなりぎりぎりになって申込んだ。定期的に通院し服薬している者は、診断書を提出して乗船が許可される。私もそのひとりだから弱者の側に入るだろう。特別なことは何もしないで、ただボーッと105日過ごしたい、それが私の乗船理由だったが、実はもうひとつ目的があった。リウマチの友人が、数年後にピースボートに乗りたいと言っているの、その下調べをしてこよう。彼女が乗るときに、まだ私が元気だったら、サポーターとして再度乗船してもいいかなとも思っていた。

4日以上船旅をしたのは今回が初めてなので、他のクルーズと比べることはできないが、結論から言うと、私はリウマチの彼女に、ピースボートの旅を勧めない。トパーズというこの船の構造が、弱者向けに造られていないということもあるが、たとえ

船が替っても、多分“NO”と言うだろう。105日の旅で、私が見たり聞いたり体験したことの中から、気になったことをいくつか拾ってみよう。今回はオプションツアー（OP）でのことを書こうと思う。

A夫妻は70歳代。夫は何回か脳梗塞で倒れ、今は右手に杖、左手は妻としっかり手をつなぎ、船内を歩いている。一時期、車椅子で移動していたときもあった。船酔いに耐えながら、小柄な妻がけなげに夫を支えて歩くのを見ると、ついおせっかいにも声をかけてしまう。そんなことから彼らと親しく話をするようになった。A夫妻は、最後の寄港地ホノルルで、“ワイキキビーチのホテルシェラトンでのんびり気ままに過ごす”というOPに参加した。10時過ぎに迎えのバスに乗り、15分ほどでホテルに到着。チェックインまでにはまだ4時間余りある。レストランで昼食をとったが時間を持て余して、近くのショッピングセンターまで強い日差しの中を歩いてきたところで、私とばったり出会った。これからまだ2時間ほど時間をつぶさなければならぬと

のこと。

海で泳いだりサーフィンをしたりする人たちにとっては何の問題もないだろうが、早く部屋に入ってくつろぎたい人にとっては、この時間つぶしはたいへんだったと思う。ホテル側と交渉して、早めにチェックインさせてあげられなかったのだろうか。A夫妻は、ペルーからチリまでのオーバーランドツアーでも、マチュピチュを目の前にして高山病で足止めを食ったりして、悔いの残ることがあったようだ。彼らから直接聞いたことではないので、詳細は書けないが…。

ホノルルで“種類豊富な樹木に出会えるのんびりトレッキング”というOPに参加したBさんの話。彼女と一緒に参加した80歳代のCさんは、ホノルル到着数日前に、ツアーデスクでそのOPの申込みをした。そのときに、自分くらいの脚力でも大丈夫か、と尋ねたという。問題ないということで参加したのだが、上りは何とかついていけたが、下りはどんどん遅れていき、見かねたBさんが、彼女のリュックを持ってやり、後ろからサポートしながら下った。添乗員はそんなことも気づかずに、ずっと先を歩いていたという。旅も後半になるとOPをキャンセルして自由行動をする人が増える。そんな中でOPの申込みをする人がいれば、ツアーデスクは文句なしに受けつけてしまうのだろうが、大きな事故に繋がりにかぬない。たとえそうなっても自己責任で済ませてしまうのだろうが…。この旅の中で“自己責任”という言葉が主催者側から何回も聞いた。

チビタベッキア（イタリア）で、私は“古代都市遺跡ポンペイとナポリ（1泊2日）”のOPに参加した。その中に、今回のクルーズ最高齢者91歳のDさんがいた。彼は、故郷の鹿児島がナポリと姉妹都市なので、このOPに参加したという。ピースボートに乗ってからの彼の生活は、夜7時過ぎにはもうベッドに入るとのこと。その日ナポリのホテルに到着したのは夜8時過ぎ、チェックイン前に食事ということになった。彼は夕食を断わり、早めに（といっても8時半くらいになっていたが）部屋に入った。私たちが部屋に入れたのは10時過ぎだった。ナポリまでの途中、ローマ市内をくるくるまわって、車中から観光したが（これは申込み時のコース内容に入っていなかったため、旅行社のサービスか？）、そ



パナマ運河

れよりも、日のあるうちにナポリに直行して、観光し、早めにホテルに入ったほうがよかったのではないかなと思う。

翌日は、ポンペイ遺跡を見学し、昼食後、5時間かけてチビタベッキアまで戻ってきた。夕食は市内のレストランでということだったが、先客がいてすぐには入れず、ピースボートがすぐ近くに見える公園で、1時間ほど待たされた。その中に91歳のDさんもいた。8時過ぎの夕食となり、船に戻ったのは帰船リミット10時の2分前だった。シャワーだけの船のキャビンから逃れて、バスタブのあるホテルの部屋でゆっくりする日が、105日間のうち1回くらいあってもいいだろうと、このOPに私は申込んだのだが、移動時間が長くなり疲れた。確かにOPの案内冊子には、移動時間に片道4時間かかるとはあったが、申込みを受けつける際に、もっと詳しい情報を提供し、きめ細かな対応をしてほしかった。すべて参加者の自己責任とせず、ときには主催者側が、「あなたにはちょっときついですよ」と断わる勇気も必要だと思う。